

朱子研究の大伽藍成る

わが国では目下、溝口雄三氏の提唱によって開始された『朱子語類』の全訳注が着々と進行している。溝口氏の発刊の辞が書かれたのが二〇〇七年のことである（訳注巻一―三）所収、汲古書院、二〇〇七年刊）、二〇二一年現在、第一六回配本（巻一六―一七）まで刊行済みである。このプロジェクトの独自なところは、特定の一機関の仕事ではなく、全国の大学と学徒を組織し、わが国では珍しいことに二〇年という長期的展望のもとになされている点である。この一大事業にはわが国漢学の底上げ効果も期待できるし、完結すれば、世界の漢学界にも寄与するはずである。日本語による訳注という制約はあるけれども、何語であれ現代の言葉によって「パッケージ」されるところが重要なのであり、この宋代の難解な遺産へのアクセスがよほど容易になるに違いない。

三浦 國雄

これはあまりセンスのいい譬喩ではないが、朱子学というこの宏大な体系を仮に自動車に譬えた場合、エンジンが『四書集注』、前輪が『朱子文集』、後輪が『朱子語類』、そして車体はさまざまな著作によって構成されている——という捉え方もできるのではないか。そのいわば双壁、いや双輪をなす『文集』と『語類』の検討は朱子学を解明する上で必須の作業になるが、前者の総体的な研究では、わが国は中国・港台の後塵を拝しているのが実情である。その画期的とも云える成果がこのほど四川省成都から届けられた。郭斉・尹波共編の『朱熹文集編年評注』全一三冊がそれである（福建人民出版社、二〇一九年二月刊）。

ところで、『文集』と『語類』の性格の相違の一つとして挙げうるのは、時間的な問題である。門生との対談・指導

〔宋〕朱熹著／郭斉尹波編注
朱熹文集編年評注
全一三冊



195×270mm 5920頁
福建人民出版社
[税込 81,840円]

の記録である後者が朱子の中年以降に限定されるのに対して（最も早い師事者は朱子四一歳時で四〇歳代は極少、大部分は五〇歳代以降）、前者は朱子の青年時代から最晩年に至る長期の幅を持つている（巻一上所収の雄渾な詩「遠游篇」などは一九歳時の作品）。作成時期が明記されている書簡や文章もあるが、大部分は無記年のままになっているところが研究者の悩みのタネであった。実証的な朱子の伝記研究としていまなお褪色していない清の王懋竑^{ぼうこう}『朱子年譜』を見れば、何篇かの作品は編年されているもののもより網羅的ではない（点校本、中華書局、一九九八年）。そうした王氏『年譜』を筆頭とする旧時代の「年譜」類を徹底的に批判し、近代的な実証方法で朱子の生涯を再構築したのが東景南氏の巨著『朱熹年譜長編』（華東師範大学出版社、二〇〇一年）である。ここには多くの朱子の文章が編年されているが、朱子の正確かつ詳細な評伝を樹立するのが目的なので、必ずしも『文集』所収の全作品が組上に載せられているわけではない。そこで、初めから『文集』所収の個々の文章の編年を試みたのが陳来『朱熹書信編年考証』（生活・読書・新知三聯書店、増訂版二〇〇七年）であった。本書は時代別に全書簡が編年されており、学界の評価も高い（本書には吉田公平氏の紹介文がある。『東方』一九九二年二月号）。ただ、本書はタイトルが示しているように「書信」（手

紙）だけで、その他の『文集』所収の無数の文章は対象外になっている。数年前には、浩瀚な顧宏義『朱熹師友門人往還書札彙編』が出た（上海古籍出版社、全六冊、二〇一七年）。本書も陳来書と同じく、朱子の書簡だけを対象にしているが、朱子のものだけでなく、名宛て人の手紙も採し出し、往復書簡集として両人のやり取りをいわば立体的に再現したところに新味がある。もちろん編年もなされており、著者独自の見解も提起されている。なお、その間、朱子の全著作を点校本として提供するという画期的な事業が実現されたが（『朱子全書』全一七冊、上海古籍出版社、安徽教育出版社、二〇〇二年）、『文集』所収作品に関しては、校勘は施されているものの編年はなされていない。

さて、我々の『編年評注』はどうか。すでにそのタイトルに謳われているように本書の生命線は個々の収録作品の編年である。上述したように書簡の編年はすでに先蹤があるが、全文章の悉皆^{しつぱい}編年は本書が初めての試みと云い得る。その書簡の編年はおおむね上述の先人達の考察に依拠するが、場合によってはそれらを「失考」「不確」「誤」などと批判し、根拠を示して新たな編年を提起しているケースもある。「未詳」とする文章もあるにはあるが、それは大変少ない。このような充実した悉皆編年が本書の第一の特色になる。その周

到さに関して一例だけ挙げておくと、本書の「遺集」巻二に収められている「与程絢書」は『宋史』巻四三七の程迥伝から輯得されたもので（程絢の父程迥の功績を讃える内容）、「紹熙三年夏」に繫年されているが、その「編年」の説明に依れば、二〇一四年に発掘された程迥の墓誌銘に記された没年（紹熙三年五月）が根拠になっているという。

ただ、些事ながら編年に関して気づいたことがある。本書「遺集」には『語類』の問答中から佚文を拾い出している例が数件認められる。たとえば「遺集」巻一所収の「答滕德粹」は「子の有無は皆命なり、必ずしも祈禱せず」という僅々十字の短いもので、これは『語類』巻一三八所収の鄭可学の筆録中に、「德粹が先生に尋ねた、十年前相次いで子供を喪った時、先生に手紙を書いてお尋ねしたところ、先生は「子の

有無は……」という御返事をくださいました」から収集したものである。この手紙の編年に関して著者達は『語類』所収「朱子語録姓氏」中の「鄭可学 辛亥所聞」を根拠に、辛亥（紹熙二年、一一九一年）マイナス一〇年＝淳熙九年（一一八二）という数字を導き出す。しかし、門生達の師事年に関しては田中謙二先生の精密な研究が重宝されていて（『朱門弟子師事年攷 正・続』『東方学報』京都第四四、四八冊、一九七三、七五年）、そこでは鄭の師事年は四度にわたっていると考証されているから、この編年には再考の余地があるう。佚文の収集も本書が力を傾注していることなので後文で少し言及したい。

本書の第二の特色は、詩詞に対する付注である。本書は個々の文章には施されていないが、詩には全作品（正集十卷、別集一卷）に丁寧な注が加えられている（殆どの作品には

□新刊□

中国現代文学史

劉岸偉 著

庚子文集

——比較文学をめぐる
研究と回想——

鄭万鵬 著 伊藤敬一・中山時子・藤井栄三郎 翻訳監修

上編 個人本位の文学 「新文化運動」における胡適／魯迅の小説／周作人／「女神」の時期の郭沫若／「五四の人」冰心／蘇雪林／張愛玲／錢鍾書の「圍城」中編 社会本位の文学 蔣光慈／魯迅の「雜文」附張天翼／沙汀／郭沫若の「転換」／茅盾／丁玲／艾蕪／聞一多／胡適の社会観の主題／許地山／徐志摩／梁実秋／沈從文／曹禺／巴金／趙樹理 附 孫犁 下編 民族主義の文学 胡適／林語堂／郁達夫／戴望舒／朱自清／艾蕪／陳銓／老舍／「四世同堂」——中国現代文学の総括／作家索引

■3500円

この三十年来に発表した比較文学論文、講演稿、書評、エッセイの中から思い出のある三十八篇を選んで一冊にまとめた。第一部 私の比較文学 修行／第二部 歴史の探索／第三部 書評と回想

■3520円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

「解題」(詩題の解説)も付す)。実は、この仕事には前段階がある。郭齊『朱熹詩詞編年箋注』(巴蜀書社、上下二冊、二〇〇〇年)がそれである。本書の編者である郭齊氏はすでに朱子学関係の著作を何冊も出しておられ、中国思想史の専門家として名の知れた学人であるが、一方で詩詞の読解に関して、鋭い感性と深い洞察力を具えておられることは筆者が間近で親しく目撃してきた。いったい、旧体制の知識人が残した詩文について、これは文学、これは哲学と初めから仕分けするのはおかしい。とりわけ朱子の場合、その父・朱松からして生前から詩人としても盛名があり、朱松にとって詩は求道の手段という側面もあった。朱子も詩才に恵まれ、「齋居感興詩」二十首のようなはつきりしたメタフィジカル・ポエトリならずとも、そこから天地宇宙や人間歴史に対する清新な眼差しを感得しうる詩作品も少なくない。本書の詩のパートはこの郭氏の旧著に全面的に依拠しているが、その後の成果も取り込まれている。詳細を述べる紙数がないが、いま挙げた「齋居感興詩」(巻四)に限って述べても、その「評論」の項に、わが国の山崎闇斎の「感興考註序」や朝鮮・任聖周の「感興詩諸家集覽跋」などが掲載されているのは新增であり、この詩に限っても全一頁にものぼる博搜ぶりである(本書は全体として朝鮮本を多数活用しているがこれは前例がない)。云

い遅れたが、「評論」というのは本書の体例の一つで、その作品に対する歴代の評を集めており、これは詩詞だけでなく、他のジャンルの文章でもその都度付せられていて、該文章の歴史的評価または朱子学受容の様態がよく分かる。なお、「絶句」に限定されているものの、本邦で詳細な訳注が共同研究によって進行中であることを付け加えておきたい。汲古書院刊『朱子絶句全訳注』がそれである(巻五まで五冊既刊)。

第三の特色として挙げておきたいのは、先にも少し触れた佚文の輯得である。宋刊朱子文集には未収の文章があることは早くから気づかれていて、明代あたりから輯佚の試みが見なされてきたが、その気運は近年になって盛り上がりを見せ、東景南氏の浩瀚な『朱熹佚文輯考』の刊行を見るに至った(江蘇古籍出版社、一九九一年)。これが決定版になるかと思われたが、その後も佚文の発見が相繼ぎ、それらをまとめ上げたのが本書の「遺集三卷」と「外集一卷」である。前者は「信の置けるもの」、後者は「真偽相半ばするが棄てるに惜しいもの」(本書前言)が集められている。ただその間、先述した『朱子全書』が編纂され、その第二六冊は全巻「朱子佚文輯録」に当てられ、「輯訂」者のはかの東景南氏になっている。その「輯録」中の「遺集六卷」とこの「遺集三卷」「外集一卷」とをざっと対校してみると、前者収載のものは後者では

「遺集」と「外集」とに振り分けられているだけでなく、そのどちらにも収められていないものも少なくない。ここから、『編年評注』では朱子の真筆作品がかなり絞り込まれていることが分かる。なお、「遺集」というと、朝鮮英祖四十七年（一七七二）刊『朱子大全』付載の「遺集二卷」が想起されるが、両者の中身を対校してみると、重なるものがなくはないものの、真偽判断の基準が異なることに気づかされる。この朝鮮版『大全』『遺集』巻一には「性理吟」（訓蒙絶句）が収められていて、前掲束氏はこれを朱子佚文として「輯録」の巻頭に収めるのであるが、『編年評注』では採択していない。朱子学へのよきガイダンスとして東アジアで広く読まれたこの連作詩が偽託であることは朝鮮でも早くから気付かれていた（当版本については藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』五五九頁以下参照。京都大学学術出版会、二〇〇六年）。

以上の大雑把な紹介でも本書の学術的価値は理解していただけと思うが、このように完備した朱子の文集が読みやすい標点本として提供されたことの意義を最後に強調しておきたい。『朱文公文集』全巻に標点を施すのはいつ始まったのか。これを東アジア漢字文化圏に拡大した場合、わが江戸期の浅見綱斎（一六五二―一七二一）が最初であり、通行の訓点付きの和刻（正集、続集、別集の全巻を訓読）は彼とそ

の一門の手に成った（京都寿文堂、一七二一年、中文出版社影印、一九七二年、汲古書院影印『和刻本漢籍文集』第七輯、第十輯、一九七七年）。中国・港台圏で云えば、断句の先蹤はあることはあるにせよ、本文の校訂も踏まえた上での正確な断句と標点は、本書の郭齊・尹波コンビによる『朱熹集』（四川教育出版社、全十冊、一九九六年）をもって嚆矢とするはずである（因みに云えば、上述浅見綱斎の「断句」のことはこの『朱熹集』でも言及されている。第十冊「版本考略」）。もとよりここには「編年」「注釈」「評論」は施されていないが、前者の基礎の上にこの『編年評注』という大伽藍が構築されたわけである。そしてさらに視野を拡大すれば、著者たちの工作单位である四川大学古籍整理研究所——巴蜀文献の搜集発掘と宋代研究の一大拠点であり、『全宋文』などの大規模な編纂事業を次々と完成——の有形無形の支援が視界に入ってくる。

（みうら・くにお 大阪市立大学名誉教授）